

安全運転管理者 推奨像のはなし

総務課 福島 秀明



自動車は移動や運搬等便利に使えるので、事業者にとって必要不可欠な物となっています。しかし、自動車には交通事故という大きな危険があります。運転者各自には交通法規を守る義務がありますが、事業主にも車両等の安全な運転に関する事項を遵守させる義務があります。自動車を使用する事業所は、事業主に代わって、交通安全教育等をする安全運転管理者を選任しなければなりません。

今年の春の全国交通安全運動は4月6日～15日でしたが、この期間中の14日に当社で安全運転管理者推奨像の引継式が行われました。

安全運転管理者推奨像とは、事業所の交通安全の自主活動を推進するためのシンボル像として、リレー式に一定期間事業所に設置されます。10年以上前にも設置していたことがあり、今回で2度目です。

前設置事業所の株式会社NTTフィールドテクノ様より、伊賀安全運転管理者協議会長様、伊賀警察署副署長様、交通課長様の立会いの元、安全運転管理者推奨像を当社の社長 家喜が安全運転管理者推奨像を引き継がせていただき、交通事故は起こさないという決意表明を述べました。安全運転管理者推奨像の他に、交通安全推奨ペナント、交通安全啓発のぼり旗、交通安全マグネットシート等も一緒に設置されました。

交通安全管理者推奨像の設置事業者になったと同時に、シートベルト着用推進モデル事業所にも指定されました。

交通安全推奨像、交通安全推奨ペナントは事務所に設置し、交通安全啓発のぼり旗は、会社入口の道路沿いに早速立てました。

7月の全国交通安全運動の期間までの設置となります。交通安全に気を付けるのは当然の事ですが、安全運転管理者推奨像の設置期間中は特に気を付けて、他の模範となれるような安全運転をするよう皆に話をしています。

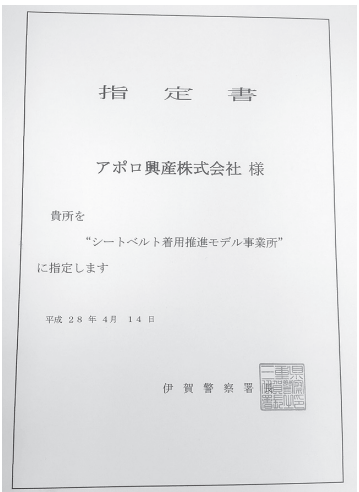
「安全運転の誓い」は運転免許を持っている者なら、誰でも知っている当たり前の事です。安全運転をするという当たり前の事が出来ないから事故は起こります。事故が起こらないことが普通であり、事故を起こすことは異常なことです。

シートベルトを着けることも当然の事です。シートベルトは警察に捕まるから着けるものではありません。シートベルトは自分を守る為に着けるものだということを再認識したいものです。シートベルトを着けるという行為は、自分はこれから安全運転をしますという意識の表れだといえるでしょう。

交通事故を起こさないということは、会社にとって社会への使命であります。当社の使用する殆どの自動車にはドライブレコーダーを取り付けており、各自が会社の看板を背負って走っているということを意識し、安全運転に気を付けています。1台でも事故が起これば、お金や時間の損失だけでなく、会社の信用も落ちてしまいます。

安全運転管理者推奨像を受けたことを機に、社員一丸となって今まで以上に安全運転を実践し、交通事故は絶対に起こさないという使命を果たして、より良い会社になることを目指します。

安全運転管理者 福島 秀明



アポロ新聞

「世界でもっとも衝撃的なスピーチをした人」 ホセ・ムヒカ元大統領

外販課 稲葉 英治

ニュースやネットで話題の人「世界でもっとも貧しい大統領」と言えば皆さんもご存知かと思います。第40代南米ウルグアイ東方共和国元大統領ホセ・アルベルト・ムヒカ・コルダノ氏です。彼は青年時代ゲリラ活動に参加し、逮捕され13年間過酷な獄中生活を送り政治家を経て大統領になった人です。4年前ブラジルで「持続可能な開発会議」と題され開催された国連会議で最後に演説をしたのがホセ・ムヒカ元大統領。大統領らしからぬ出で立ちで誰も注目をしていなかった小国の大統領のスピーチに観衆は徐々に引き込まれ、スピーチが終わると、鳴りやむことのない拍手喝采に包まれたと言われています。この演説が「世界でもっとも衝撃的なスピーチ」と言われるようになりました。その演説の一部をご紹介します。

「ドイツの人が1世帯で持つ車と同じ数の車をインドの人が持てば、この惑星はどうなるのでしょうか。息をするための酸素はどれくらい残っているのでしょうか。西洋の富裕社会が持つ傲慢な消費を世界の70億～80億の人ができると思えますか。その原料がこの地球にあるのでしょうか。可能ですか。」と本音をストレートに問いかけています。

ホセ・ムヒカ元大統領は人間が作った巨大な消費主義社会に翻弄され、コントロールできなくなっていると警告しています。消費が世界を動かし、社会を作っている現在では、私たちは消費を限りなく続けなければならないと警告しています。消費が止まれば経済が麻痺し、不況に陥ると述べています。確かにそうかもしれません。ですが、現況は消費マーケットを食いつぶせばまた別の消費されるマーケットを求め、また次のマーケットへと移り続けます。或いは次の消費を生むために人の欲望をかき立てる商品を作る。こんな悪循環を繰り返し生きています。しかしながらこの繰り返しを誰も否定することはできないと思います。誰も必要以上の物を求め、欲しい物を持ちたがる。必要と欲しい物が同じになってしまっているのではないのでしょうか。

さらにホセ・ムヒカ元大統領は「貧乏な人とは、少ししか物を持たない人ではなく、無限の欲があり、幾らあっても満足しない人のことだ」とも言っています。言われてみれば心の痛い事かもしれません。人間誰も欲があり、贅沢をしたいと思っているはずです。(そうですね。)欲しい物が手に入る生活こそ裕福だと言う価値観の中で生きてきたのではないのでしょうか。よりたくさんの物や、より高価な物を持つことこそが豊かなことと信じてきたのではないのでしょうか。それこそが生活レベルの向上の証になると思っている。

ですが、ホセ・ムヒカ元大統領は贅沢とは縁遠い人なんです。大統領官邸にも住まず、自分がもつ農場で暮らしたそうです。移動には大統領専用車も使わず、唯一贅沢と言える1987年式のフォルクスワーゲン・ビートルで自らハンドルを握って出かけたそうです。そんな生活ぶりを聞く限りホセ・ムヒカ元大統領は欲がないのは誰の目にも明らかです。

最後にホセ・ムヒカ元大統領は「発展は幸福を阻害するものであってはならないはずです。発展は人類に幸福をもたらすものでなくてはなりません。愛を育むこと、人間関係を築くこと、子供を育てること、友人を持つこと、そして必要最低限の物を持つこと。発展はこれらをもたらすべきです」と言っています。

素朴な人柄の大統領が無難な意見ばかりの演説をする他の大統領とは違って率直に現実に向けた厳しい本音で問いかけた事に誰もが感動し、このままの消費主義社会でいいのかどうか自問自答すると思います。